

駒ヶ根市文化財

名称	光前寺の絹本着色十二天像
種別	美術工芸品(絵画)
指定	長野県宝(平成8・2・15)
所在地	赤穂29
所有者	光前寺
説明	<p>十二幅 14世紀作、各寸法:縦86.0cm、横35.6cm</p> <p>十二天とは、東西南北とその中間の八方に、天地、日月を加えたもので、道場を守護する役目を負うものである。灌頂(かんじょう)の儀式に際して、当初は楽人が十二天に扮装していたものが、絵に描かれていたもので代用されるようになってから、屏風形式のものが作られ、ついでに光前寺本のような掛幅が作られるようになった。密教寺院では両界曼荼羅とともに最も重要な仏画であり、遺品も少なくない。県下には泉福寺(東筑摩郡明科町)と善光寺大勸進に中世にさかのぼる作品が伝わる。</p> <p>泉福寺本は天文3年(1534)の修理銘があるが、室町時代後期の作であろう。伊舎那天(いしゃなてん)・日天(にってん)・火天・地天・梵天(ぼんてん)の五幅しか存在しないが、地天が唐装、梵天がやはり唐装で柄香炉を持つなど、図像に自由さが認められる。善光寺大勸進は水天と羅刹天が後補のものに変わってはいるが、ほかは室町時代初期をくだらないものと思われる。</p> <p>光前寺本は、十二天が完備しており、かつ保存状態がよい。各尊の頭上に月輪中に書かれた梵字が備わるのも本格的である。</p> <p>全体として同じ天台宗の滋賀・西明寺本(重要文化財)と図像が似ている。製作年代は金泥の盛り上げ彩色が認められるところから南北朝時代と思われる。</p> <p>『長野県史、美術建築資料編 全一卷(一)美術工芸』より</p>



焔魔天像



梵天像